
退屈と、出会った彼女

愛福

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

退屈と、出会った彼女

【コード】

N0832U

【作者名】

愛福

【あらすじ】

退屈で空虚な日常。そんな私を変えてくれたのが、あのこ、だった。作者は、小説初トライですので、至らない所が多々あると思います。大目に見てやってください

一話

嗚呼

私は

何時^{いつ}まで

耐えれば

2

良いの

だろっ

いの

終わらない

退屈に

そんな時だ

彼女に

会ったのは。

果たしてそ

れは

偶然か

必然か

私の名前は木津彩^{きつあやか}私は世に言う恵まれた家庭の子、親はしっかりと働き、きちんと三食食べられ、有名私立学校に通わせてもらって

る。とりあえず生きていく上で不便なことはなにもないし、高望みしなければほしい物はだいたい買ってもらえる。

人によつてはそれはとても素晴らしいことだし、とても恵まれているという。

頭はいい方。学年で二十番以内にはいつも入っている。兄弟は兄が一人いる。

「うらやましい〜」

「いいことだ」

周りは皆私を「いい子」だという。しかし、私は違う。けしていい子などではない。

まあ、「いい子」を演じているのは事実だ。周りが決定したら私はそれに逆らわない。例えその先に何が待っているのか予想が出来てそれを止めようとしたら出来る状況にあつても私は何も言わない。ただにこにこ微笑んでいるだけだ。

何故言わないのだ！友達が間違つていたら助けるのが正義だろう！
！という熱血漢の人は読まなくて結構だ。私がなにも言わないのは理由がある。

「めんどくさい」

これが本音だ。無理して決まったものを覆さなくてもいいだろう。

とはいえ、私も昔からこんな冷めた奴だったわけではない。小学校の時は、進んで発言し、場をより良くする為に毎日ががんばっていた。その結果、貼られたレッテルが「KY」「空気を乱す」「頭良いからつてちようしこいてる奴」「常識的に考えたらわかるのにねえ。」などなど。正直、疲れた。

耐えられなくなった私が逃げた先は二次元だった。面白い。

お陰で今でもよく意識があちらに行つてしまつたり、友達に引かれたりする。ああ〜

そんな私は、いつしか退屈になっていた。

二次元のことを考えても、パソコンに向かっていても、この空虚は埋まらない。

いつも心のどこかに穴が開いているようだ。かといって友達に話しても、分かってくれる奴なんて居る訳がない。私の周りの友達は、なにも考えず、ただ突っ走っていったり、今日楽しければそれで良いとばかりになにも考えていないのだ。面白くない。何を考えているんだか。ふざけるな。言いたいことが山のようにある。しかし私は笑っているだけ。何も言わず微笑んでいるだけ。

たまにそんな自分がすごく嫌になる。嫌だ嫌だ。何で？どうして私の周りにはこんな奴らしかいないの？

叫びたい暴れたい何かを壊したいそんな衝動が私を駆り立てる。でも、私は何もせずただただ立っているだけなのだった

一話（後書き）

ああ、本当にこんなんでいいのやら。とても不安です。意見、感想
などございましたらお書きください

一話（前書き）

が、がんばってかきましたあ。

一話

今日の二時間目は音楽の校歌のテストだった。

歌はいい。歌っている時はどんな空虚も、心の闇も忘れてしまふ。

言い忘れていたが、私はテニス部だ。この学校には合唱部なるものがあり、私もそれに入るためにこの学校にやってきたようなものだが、一緒に受験してきた友達×3が全員テニス部に入り、

「え〜彩も一緒にテニス部に入ろうよ〜合唱なんてただ歌ってるだけじゃん。もつと運動したほうがいいってえ〜」

とかふざけた言いがかりをつけてきやがり、今に至る。

音楽の先生もびっくりしていた。

何故なぜって私の歌が綺麗だったから、ではなく、私と一緒に歌った一（グループ分けする時に余ってしまった）水原結城ゆづきさんの声がとても綺麗だったからだ。さすが合唱部、といったところか。

きっと私の声は彼女の声に紛れて聞こえなかったんじゃないだろうか。ちろり、と嫉妬の炎が私を舐める。まあ、そんなのは生まれ持った才能なんだ。くらべるほうがおかしい。

「彩〜とってもきれいだっただよ〜うん、きれいきれい〜」

お世辞を言ってくる私の友達。私より、彼女のほうが綺麗なのは誰だって簡単に分かるはずだ。

水原さんは、ちょっと、いや、かなり変わった性格の持ち主で一人でいても平気、馴れ馴れしい『友達ごっこ』が嫌い、それより本が友達、といたいわゆる孤独な人だった。

私も一度喋ってみたことがあったが、ああいうタイプの人には苦手だ。正直、今度の班決めの時も内心とても嫌だった。

二話（後書き）

え、はい、がんばりました。私は、まだなめらかにうつことができないので、亀更新になるとおもいます。わやや。

三話

いつも通り面白くない授業が終わり、部活で学校の周りを走っていた時だった。

「私の目は蒼い」

校舎から綺麗な声が降ってきた。合唱部の透き通った声だ。羨ましい。こんな友達がいなければ、私だって。

うっといしい。胸の内で毒ついてみる。いつもいつも邪魔ばかりして。

でも言わない、言えない。私は独りでいることが耐えられない性格だ。

そんなことをして友達がなくなると思うと、身震いが来る。

水原さんはいったいどういう感性をしているんだろう。まったくわからない。

家に帰り、パソコンを開く。

一年間何も買わずにやっと手に入れた念願のパソコンだ。

「新着メールは」っと。お。遥菜からだ。」

遥菜というのは私の友達で、他にも一緒に受験してきた舞と凜が今のところの私のグループのメンバーだ。

件名：彩、ごめん！！

そこには衝撃的な内容が書かれてあった。

「彩へ。今度の遠足、私はやっぱり舞と行きたいので、他の人と行ってくれませんか？」

そんな。グループは三人でひとかたまりだから、誰かは別れないといけないと思っていただけ、まさか、私とは。

「遥菜へ。私じゃないとだめ？」

そう打つと、返事が返ってきた。

「ほんとごめん。舞と凜にはもう連絡しちゃったから。」

そうか。私が抜けるというのは決定事項なのか。

そう思うと、何故か無償に腹が立ってきた。

「だったら遥菜が

うっん。ちよつと考えてから文を直す

「うっん。まあ、いいよ。」

「そう！ありがとう！」

おらあ、起きろ！

「あゝミ さまがあゝ」

「何寝ぼけてんだ！」

「あゝお兄ちゃん。今何時？」

「AM7:50」

「うわあああああああああ！……！！……！！？」

「うるせえ！」

「やばい！ち、遅刻するうっ！！！」

ただでさえ、学校遠くて通学大変なのに！！

「おい、起こしてあげたこのすごい兄貴への感謝は？！」

「そんなん後後！！！！いつてきます！！！」

私はフルスピードで支度を済ませ、家から飛び出した。

チャイムが鳴る三秒前に教室に飛び込んだ私は、男子から

「やゝいち・こ・く！ち・こ・く！」

とめてはやされた。少し腹が立ったけれど、がまんして席に着く。

今日は遠足の班決めの日だ。

三話（後書き）

りんかから亀じゃなくてウサギって揶揄されました
確かにそうかもしれない。

四話（前書き）

えゝもうそろそろネタが無くなってきたかもしれない。

四話

「彩〜ごめ〜ん。」

やっぱり私は余ってしまった。

昨日寝ぼけていたからもしかして私の見間違えかと淡い希望をもっていたんだが。

まあ、それはないか。

「じゃあ、他のグループはって、ま、マジですか。」

どうやらもたもたしていた私が悪いらしい。私の他で余ってる人は、私を含め、三人。

…………… どうやら余った人でワングループらしい。

で、余ったのが、

そこそこお友達の関谷貴理さん

私

私が苦手な水原さん

何で水原さんなの！？これはいったい何の罰ゲームなんだ！いや〜
〜！！！！でも、まあ、これを機会に仲良しになっておく
つていうのもいい・・・かな？あ〜なんかこっち見てる！怖い！目
つきが何となく怖いよ！やっぱり友達になるのは無理だ！
そんなこと考えてたら水原さんの手が伸びてきた。

「よろしく。」

握手しろってことか。

つまあいいや。と思って握ったその手は少し汗ばんでいた。

「え〜つぎにバスの席を決めたいと思う。」

そ、そうか！私にはまだバスの席という選択肢がある！これで友達と一緒にいたら何とか耐えられる。

「バスの座席は班ごとで、決めてほしい。」

は！？まで。おい。班って事は、水原さんと一緒なのか？

なんか、嫌気がさしてきた。こんな事決めた奴、誰だよ。学級委員だったか？だったら遙菜のはずだ。友達とかそんなかなぐり捨てて、言ってるやりたい。もっと考える！って。

でも、がまん。いつものことだろ？

そう自分に言い聞かせる。友達がいなくなる、そんなことしたら。

「ふうむ。何か言いたいことがあるんじゃないの？木津さん。」

水原さんが私の顔をのぞき込みながら言ってきた。やばい、気づかれた？胸の内ですくらすくすしても悟られたことはかつて一度もないのに。

「な、何言ってるの！？そ、そんなこと無いってば！」

慌てて否定したつもりだが、

「なら、言いたいこと、私が代わりに言っただけよっか」

なにをっ・・・！

「その案はどうかと思います。」

あゝあ言っちゃったよ。決まったら、私はそれでいいんだけどなあ。
「え〜どういことお？」

いつも通りのブリツ子口調で遙菜がきいた。私だったらこの時点でやめてる。

「まず、班とバス座席が一緒だと、特定の人物としか話しません。確か、遠足の目的は違う小学校から来た人とも仲良く一緒に楽しむう、でしたね？でしたら、特定の人としか喋らないというのは些か問題があると思います。私でしたらその様なあらかさまに適當感漂うやり方で決めるのはいかがでしょうかと思います。なので、私は皆に平等なくじ引きを提案します。これなら好きな子同士などの方法よりも遙かに効率的でなおかつ、不平不満が出にくいからです。私からの意見は、以上です。」

す、すごい。いつもならこのあとに遙菜がでもお〜とか言ってなかなか進まないのに、完全に論破しちゃってる。先生もびっくりしてるよ。

でも何で私の思ってること分かったんだらう？

四話（後書き）

すいません。いつも以上に長いです。途中で切ればよかったかも。近々二次創作のほうをうPしたいと思います

五話（前書き）

毎度のように、すみません。
もうそろそろ時間がねえ。

があるとは。」

なにを。むかついた私は

「一人で分かったような顔をしてないでさっさと教えなさいよ!」
知らずに口が動いていた。

「うむ、どうしようかなあ。」

水原さんの瞳はいたずらっ子の目そのものだ。

「よし、教えよう。ただし、これは秘密だからな。ちょっと耳を貸せ。」

何をしようというのだこの人は。

しかし、気になった私は言われるがままに耳を近づけた。

「相手の気を知りたい時は、真っ直ぐ相手を見る。中でも思ってる事が出やすい所があるんだが。」

「そ、それってどこなの?」

「瞳だ。目を見れば相手の思っていることがだいたい分かる。」

嘘だろ。私はばれたこと無いんだから。

「ふんそうなんだあゝありがとう!」
気持ちを隠すのは得意だ。

「そうか、やはりこんな話、いつても分かる奴はなかなかいないから、少ししてみたんだが、見込み違いだったようだな。」

「えゝわかったよ?」

「今のお前、私の言ったこと、信じていないだろう。表情をつくる

のは得意だと思っ
てないか？」

どきっ！何ですぐ
ばれるんだろう。

「だから、目を見
ればわかるんだ。目
だけじゃない、雰
囲気、動きなどか
らも判るがな。」

この人は目を見て
そんなことわかる
のか。恐ろしいな
あ。

五話（後書き）

いったんここで切ります。

六話（前書き）

よく考えたら、期末テストが近づいてる！やだな！

六話

「あと、これは余談なんだが、」

余談なら喋らなきゃいいのに。

「お前、なんか退屈してるだろ。」

ざくづつ！

心の深いところを覗かれた気がする。

「な、なんで？」

「いや、何となく、全身から嫌々やってますオウラがいつも出てるんだ。私もそうなんだが。だからこんな深い話をしている。他の女子に話しても理解出来ないだろうな。私もたまにすごい退屈になる。」

びっくりした。同じように思ってる人が身近にいたなんて。

「わ、私も。」

「で、この学校来たら、私と同じような雰囲気の方がいるじゃん！びっくりしてさ。まあ、周りに囲んでる女子を分け入ってまで友達にならなくてもいいかと思って、そのまんまだったけど。いつか、友達になりたいな」と思っていたんだが。」

「そ、それだったら今からでも。」

「あ。そう言えば、私は親友が一人いれば、ただの友達はいらない。」

だからお前のグループには入らないし、嫌気がさしたらすぐに絶交してくれても構わない。」

この人は何でこんなに平気な顔をして、こんな事を言えるんだろう。「ねえ、前から気になってたんだけど、何でそんなに一人でいることが好きなの？」

ぼろり、とつい本音が出てしまった。

「うっそれは……………」

少しだけ嫌悪感をあらわにし、彼女はこういった。

「言いたくない。知ってもお前に得があるとは思えない。」

「なんで？」

「嫌な思い出がある。」

「そう、かあ。」

無理に聞きたい話題でもないし、あんまり深く聞いてもいやがられるなら、聞かない方がいいだろう。

そう判断した私は、最後にこういった。

「謎を解いてくれてありがとう！おかげですっきりしたよ。」

水原さんはすぐに元の顔に戻り、嬉しそうに頷いた。

「ああ、また何か悩みがあったら来い。助けられる保証はないが、話ぐらいなら聞いてやる。」

頭のもやもやもすっきりしたし、水原さんともなんかいい感じになって、よかった。

もつそろそろ遠足だ！

六話（後書き）

明日校外学習です。

ネタ探すついでに楽しんできたいと思うのですが、
私はどうも団体行動が苦手っぴいです。

七話（前書き）

ついにテスト週間だ！

やばい。

この前学年20位以内だったけど、
油断していると落ちるよなあ……。

七話

遠足当日。

私の隣に座ったのは水原さん。通路を挟んだ向かい側に座るのは遥菜と舞だった。

バスレクをするから退屈することはないんじゃないかと思っていたら、いきなり隣から退屈そうなあくびが。

「ふあ〜。」

「み、水原さん！いきなりあくびって！バスに乗ってまだ三分立ってないのに！」

「昨日、12時に寝た。そんで、5時に起きた。」

なるほど、そんなけしか寝てないのなら、眠くて当たり前か。でも、5時ってちよつと早すぎないか？睡眠障害なんじゃないかこいつ。

「それじゃあ、バスレク始めるよ〜！」

大いに盛り上がった声が後ろの席から発せられた。同じ班の男子だ。いつもいつもうるさくて、ほんと、一回言いたいよ。黙れって。

「すっ〜」

気がつくくと、水原さんは寝ていた。しかし、

「ねえ〜この遠足でさあ〜」

隣から話しかけて来る女子がうるさいらしく、

「うっ、ん」

結局起きてしまったようだ。

え、何でカッター出してるの？あれ、なんか刃だしてるし。ちょよ！

「だめえ~~~~~!!!!!!」

慌ててカッターをとりあげ、刃をしまい、水原さんを見ると、正気に戻ったらしく、

「あ、何やってるんだろう私」

と言っていた。無自覚のうちにカッター出して人をねらうなんて、どんな育ち方をしているんだ。

「あゝ私、完全な静寂の中でしか眠れないから。ちょっと静かにしてくれないかな？」

遥菜と舞に言っていた。やさしく表現すれば言った、なんだけど、厳しい言い方をすれば、それは注意した、または叱ったに等しい態度と目をしていた。

でも、遥菜達にそんな事通じるはずもなく、

「ええ〜単に眠らなきゃいい話じゃない〜バスは騒いで行くのが楽しいんだよ」

「そうそう。水原さんはそういうこと気にしすぎだよ!」

とふざけた調子で言っていた。

「どうせ、眠れないのなら、耳栓でも持ってくればよかったじゃん。」

ふざけ半分に彼女に提案したところ、

「ああ！その手があった！」

と自分のバックの中を漁り始めた。

そこから出てきたのは、耳栓。

え？いったいどこから出てきたんだ？そういえば彼女のバックはやけにばんばんだが、

いったい何がどれだけ入ってるんだ？耳栓も入っているって事は、まさか、

「水原さん、本とか、勉強道具とか、もしかしたらそのほかも入ってない？」

「何でわかったんだ？」

と言って次から次へと取り出す物の数の多さ！

「えーっと、まず本が3冊、勉強道具が、保健、国語、数学、理科。CDが私の好きな奴5枚と……。」

ちょっと待て。こいつの鞆は4次元ポケットか。

「水原さん、いらぬ物は持ってこないって言われてたよね？」

「しかし、先生は、本は暇があるかもしれないから持ってきてもいい、CDはBGMにかけるために提供してくれるなら良い、テスト期間中だから勉強道具は良い、と言っていたぞ。」

成る程、それで上手く先生の目を欺いたって訳か。

「でもどう考えても、この自由帳は駄目だと……。」

「おやすみっ！」

上手く逃げやがったこいつ。

なんだかんだあって、途中男子が先生に怒られたりするハプニングがあつたが、一行は無事、遠足の目的地、白波高原へ着いた。

七話（後書き）

校外学習に行ってきた。

歴史ある建築物などがたくさんみられてよかったですと思います。
違う学校からきた人と仲良くなるって良いですね。

八話（前書き）

やっとテスト週間オワタ〜！
これで二つしんができるぜ

八話

「シートシート。よし、とこれで眠れる。」

水原さん。あんたいつたい何時間寝るつもりなんですか。

「彩いろけい〜一緒に泥警どろけいしよう〜?」

「え。でも水原さんが」

「いって放つとけばじゃあ、彩鬼ね!」

これではグループの意味がないんじゃないか。

そんなことを考えながら、私は舞達を追いかけた。

ほんと何やってるんだらう私。

鬼ごっこなんてあんまり面白くないのに。

気づけば男子も入っていて、私は一生懸命追いかけた。

でも速いのなんのつて。中学校の頃の男子つて足がすごい速いんですけど。

結局女子が全員捕まって、残るのが男子のみ。

私の体力じゃあ、遅めの男子一人でもつらいんですけど!

あ、あの人に頼んでみたらどうかな。あの木陰で休んでる体力が残ってるあの人

「水原さんもやるつよ！楽しいよ！」

「嫌だ」

そ、そんな即答しなくても良いのに、ちょっと傷ついた。

「言っただろう。私は友達ごっこは嫌いだ。それに私は今休息をとっているのがわからないのか。疲れるからやりたくない」

「でも、みんなで鬼ごっこするのも楽しいよ？それに、この遠足の目標は「みんなと仲良くなるつ」なんだし。」

「そういえばそうだったな。こんなきれい事の目標決めたのいったれ何だか」

「でも、」

「あゝもううるさい。ちょっと私に休暇を与えてくれ！」

そういつと横を向いてしまった。あれ、もしかして拗ねてる？

「いいからやるつよ！」

「う〜」

そういつと急に諦めたように顔から表情が消え、

「結局やらされるんだろ。まあ、いい。やってやるつ。ただし、私は疲れるのは嫌だ。作戦を練るぞ。」

「や、作戦？」

「いいか、見ている限りではおまえらはとても効率の悪い追いか
方をしている。」

基本的に、こういうときは集団で一人を追いかけて、捕まえていくの
がいい。」

「でもそれって、いじめになるんじゃないかな。」

「いじめもへつたくれもない。これはきちんとした作戦だ。駄目だ
ったら、3〜4人で一グループを作り、攻めるいわゆる『集団戦』、
守りを堅くする、他には、地形を利用するとかもあるんだが、ここ
ではあまり無意味だろう。」

確かにだっ広い高原では袋小路なんかもあるはずがなく。

「だけど何で一人一人追いかけていけないの？」

「ああ、中学生の男子は体力がある。女子はとても追いつけないだ
ろうし、集団で攻めるのがいいんだ。」

「へえ〜あつたまいい〜！お〜いみんな！ちよつと集まっ〜！作
戦たてようよ〜！」

こうして水原さんの案を使った私達は、男子を全員捕まえることが
出来た。

八話（後書き）

がんばったぞー！！

九話（前書き）

ずいぶんほったらかしでした。すみません。
遠足が長い！あと2、3話は遠足編かな・・・。

九話

「ねえねえお腹すいてきたし、もう弁当食べない？」

そろそろ12時になりそうな時にそんな提案をした。

「え〜じゃあ、一緒に食べようよ！」

遥菜達も一緒に食べようということになり、結局女子全員で昼食をとることにした。

いや、全員ではないか。一人輪の外で寂しく食事をとっている

「水原さんも此処こゝ来たら？」

「う〜ん、私は一人でもいいよ」

「そんな寂しいこと言わずに！ほら！」

舞が水原さんを無理矢理引っ張ってきてしまった。こういう事するとこの人、猛烈にいやがる。

「一人で寂しく食事なんて、だめだめ！みんなとお喋りしたほうが楽しいに決まってるんだから！」

出たよ舞の無理矢理人を従わせる強引な手口！

「ではお言葉に甘えて」

あれ・・・？なんか素直に従ってる。なんでだ？これまで話して

た感じだと、すっごい嫌がると思ったんだけどな……？

「ごちそうさま。」

なんと水原さんは輪に入って2分と経たずに水原さんは弁当をたいらげていた。

はやっ！しかもその間まったく喋っていない。

私も気になったので早めに弁当を食べ、木陰で休んでいる水原さんの所へいった。

彼女は何か自由帳に書いているところだった。

「うざったらしいな〜ほんとサボタージュして抜けだしつつたら駄目かな〜ほんと礼儀のなっていない人って取り扱いに困る。あそこで断ってたらまたどうせノリが悪い〜とか言っって強制的に入れられたんだろうしな〜」

なんだこの文句の羅列は。

「いつの間に居たんだ」

驚いた顔をしている。背後に人が立ったら普通気づくと思うんだけどな。

彼女はとても焦っていた。

「こ、これ見たか？」

「ちょっとだけ。」

「他の奴らには絶対言つなよ。」

なんだろう。

「私は不満が言えない時に、紙か何かに書き殴るんだ。すつきりするぞ。」

「えくでも誰かに見られたらまずくない？」

「まあ、見せなきゃいいんだが」

そんなもんかな・・・？

「本当は友達に洗いざらい話すのが一番すつきりするんだが、こんな性格だ。友達なんてできないし。まあ、一人は気楽でいいからな。」

彼女はとても悲しそうな顔をした。

ああ、この人は孤独なんだな、と思った。

「じゃあ、私が友達になつてあげるよ。水原さんって固いから、今度から結城ね！私のことは彩って呼んでくれればいいから。」

「強引だな。まあ、いいか。」

こうして結城と友達になれた。

九話（後書き）

いつもながら駄文でごめんなさい

十話（前書き）

ひ、久しぶりです。

いつものことながらワケワカメです……。ごめんなさい。

十話

「みんな〜！宝探し始めるよ〜！！！」

お昼をみんなが食べ終わったころ、レク担当の人が声をかけてきた。もうそんな時間か〜

「ルールは、ここどこかに隠されているスーパーボールを探す！大きさと色で得点が決まってるよ！時間内にどれだけ集めるかがポイント！班対抗で、違う班の人が同時に見つけたらジャンケン。じゃあはじめるよ〜スタート！」

うわあああああああああ！！！！
男子がこぞって駆けだした。

女子はというと、

「だるくない〜？」

「めんどいからさぼる〜？」

やる気ナッシング。あ〜あ。

ん、水原s・・・結城の姿が見あたらない。

「お〜い！」

すぐっもう十個ぐらい見つけてる。しかもどれも大きい！

「ん、おまえはやらないのか？」

「だってみんなやってないし」

「つまらん。」

「しかしこの短時間でよくこんなに見つけたなあ。」

「私だって寝転がってばかりじゃなかったんだぞ。あの時、私はどこにあるかそれとなく探してたんだからな！」

どう見たってぶらぶらそこらを徘徊しているようにしか見えませんでした。

「カムフラージュしてたんだ。」

え〜・・・

「でも、いつもならやらない？」

「だって、一番になったらなんかあるらしいから、がんばってたんだよ。」

「そうなんだ〜」

「ほらお前も探すんだな。」

うまく口車に乗せられた私はスーパーボールを探すことになってしまった。

とほほ〜。

「それでは結果発表をします！三位、1班、二位、2班、一位は5班でした。お疲れ様でした！」

なんと一位になった私達は、景品をもらえることになった。

「まあ、当然だな。」

結城をみると、すごいどや顔をしていた。

まあ、あんなにこき使われて隅から隅まで探させられたら一位になるわなあ。

「景品は、なんと、ランチおかわり優先権です！！おめでと〜ございませ〜す！！」

え〜ランチおかわり券か〜私はそんなにいらさないな〜

「意外としょぼいんだな。わたしはもつとすごいのが来るかと思っ
ていたぞ」

「たとえば？」

「図書カードとか、商品券とか。」

………現金な奴。

「だが、曲がりなりとも私立だからな。まさかランチ券なんて・・・」

「残念だったね〜彩一生懸命探してたのにね〜」

遥菜達が口を挟んできた。

「まあ、わたしはうれしいや。ランチでおかわりって、なかなかできなもん。」

本当はあんまりうれしくないけど。

「でも水原さんが突然引つ張っていったから、心配になってさ〜」

そんな上辺だけの心配なんて、わたしはいらぬのに。

まあ、いつものことだ。

「まあ、私の我が儘わがままでつきあわせてしまったことは事実だ。すまなかつたな。」

「そんな、結城が謝る事じゃないよ!」

「じゃあ、彩行こう?」

さっさとバスに乗る遥菜達。

薄情な。

「結城、私は気にしてないから！」

遙菜達と一緒に列の座席に座る間際、私は彼女にそう声をかけた。

帰りのバスも座席指定だったらよかったのに。

「そうか。それならよかった。」

ぐっすり寝ているはずの彼女からそう声が聞こえたのは、気のせいだったのだろうか。

「そういえばさ、彩っていつの間にか水原さんのこと結城って呼ぶようになったよね。」

「え、う、うん……。」

「水原さんってさ、噂によると、小学校の頃すっごく荒れてたらしいよ。あんまりかかわらないほうがいいと思う。」

「え、でも、この学校に来られたって事はそこそこ頭いいはずでしょ。」

「それがさ、なんか、一度に十人の男を倒したとか、柔道と空手で段持ってるとか、そんな噂が多くってさ。」

「じわ〜い……！」

舞と凜はあきれほど噂好きで、誰と誰が恋人だとか、何ちゃんがこんな事をしたとか、誰が何を好きらしいとか、そんなことをとてもよく知っている。将来絶対噂好きの主婦になるなこいつら。

しかし、柔道と空手で有段者って……ちょっと怖いかも。

「それからあゝ」

帰りのバスはそんなたわいのない会話をして終わった

十話（後書き）

えー更新できなくてすみません。
今回長いです。

自分で「長あああああ！！」
と叫ぶほど長いです。

どこで切れば良いかわからなかったもので・・・orz
ごめんなさい。

十一話（前書き）

最近、新しいネタ探すので必死です。
ちなみに私は空手をやってますが、まだ白帯なので雑魚です。

十一話

結城の恐ろしさを初めて知った日。

結城は先輩から目を付けられているらしく、あまり元気そうではなかった。

何でも、学校内で携帯を使っている先輩を注意して、先生に言いつけたらしいのだ。

そんなことやらなくてもいいのに。

そこに、一人の女の先輩がクラスにやってきた。

「水原結城、木津彩。お前らちよつと来い。」

「なんでしよう?」

明らかに嫌そうに言った結城は、先輩にしぶしぶついていった。

気になった私もついて行つたが、結城の目がなんか怖かった。

「あ、あのう……。何で私達を?」

聞いたが、返事はなく。

連れてこられた場所はあまり人目が着かない場所。

「お前最近、出しゃばり過ぎなんだよ!」

どうやら携帯を没収されて腹が立つたらしい先輩が結城にいちやもんつけていた。

「おらあ!」

先輩が手を出し始めた。私は結城に加勢しようとしたが、あしがすくんでうごかない

「あぶつ……。!」

あぶない!

「ふ、年下に手は出してはいけませんよ。」

蹴りを受け止めた結城の姿が!

ちよつなに!?この人、もしかして、すんごく強い?

数分後。一発食らった先輩は、去っていった。

「月の出てる晩ばかりと思うなよ！」
捨て台詞が格好悪かった。

帰り道、駅でめずらしく結城のほうから声をかけてきた。

「よっ！」

そこからあの時の話になった。

「いや、あそこでとっさに受けれてよかった。」

「あの時私すごく怖かったんだからね！」

「でも、あれぐらいなら、なれてる。だいじょうぶだ。それに、私は向こうから来ないと手、出さないからな。それだけは守ってる。」

私のほほを冷たい汗がつつた。

「なれてるって・・・。」

あなたにいったい何をしてたんですか。

ちょうどその時電車が来て、乗り込むと、満杯の電車で結城を見失った。

十一話（後書き）

結城は強い。

彩はほんとに弱い。

どれぐらい弱いかっていうと、ドッジボールの球が受け止められないぐらい弱い。

戦闘シーンは皆さんのご想像にお任せします。

十二話（前書き）

明日から夏休み！

ということとで無理矢理時間軸を合わせました。

十二話

あつしたからくなつやすみいゝ

思わず踊り出したくなるような快晴の日！

蝉の鳴き声！

輝かしい明日あす！

すべてにおいてここまで嬉しい日ってなかなかないよ！

で・も

学生には学期の終わりに必ず貰わなければいけない忌々しい紙がある。

そう、言わずと知れた「通知表」！
最悪だ！

「木津彩！」

「っはい！」

じじい〜怖いよ怖いよ〜

「うん、頑張ったね。2学期はもっと授業態度をよくすると成績はもっと上がるよ。」

ちらっと中を見ると、3が3コ。4が5コ。5が1コ。

まあまあいい方が。

「ねえねえ彩はよかったんでしょ〜みせて〜」

取り上げられた。まあ、いいけどね。

「え〜何これ、彩、天才じゃない?」

すっかり騒ぎ立てられてしまった。天才とは、オール5とつたりする人のことだと個人的には思っただけだな。

「ほら並んで〜」
つぎは終業式だ〜

まったく、何で校長先生や生活指導の先生はこんなに長いんだろう。ぼーっとする以外出来ないじゃないか。

しかも生活指導の先生、話長いのに「え〜」が多いんだよ!多分話の三分の一ぐらい「え〜」で時間稼いでるし。

「以上で一学期終業式を終わります。一同、礼。」

やっと終わった。

いやっは〜!!!明日から夏休みだぜ!!!

「ねえちよつと聞いてよあの生活指導の先生、えゝを98回言ったよ！」

結城、あんたねえ。

「そんなんかぞえてたの。話聞いておきなさいよ！」

「だつて暇だつたんだもん。」

まあ、そうだけど、さあ……。

「そう言えば、夏休み、私暇だからうちに来て遊ばない？」

そういや、結城の家には一度も行ったことがないなあ

「うん、いいよ！いつにする？」

「じゃあ、フがつの？」

結城の家があゝどんなんだろ！

十二話（後書き）

ついに夏休みですよ！

がんばります！

そう言えば、彩達が通ってる学校ってあんま私立らしくないですよ。
ね。

十三話（前書き）

とりあえずこれで彩編は終了です。次からは結城視点になります。

十三話

「じゃあ、行きますか。」

結城につれられて、来た場所は、

「ごうてい

「え、なにここ、すご！」

「家だよ。はいつてはいつて。あ、待った。」

深刻そうな顔で振り向いた。

「実はうちのおばあちゃんすつごく礼儀作法に厳しくて。ちゃんと挨拶してね。じゃないと次回以降家に入れてもらえなくなったりするから。」

「げっ！私礼儀とかまったく分からないのに！」

「お婆ちゃん、連れてきたよ。」

そう言う中から出てきたのはやさしそうな小柄なおばあさん。

「こ、こんにちは。」

「結城から話は聞いていますよ。さあ、どうぞ。」

「ほっ・・・ひとまず安心。」

「じゃあ、私の部屋で喋ってるから。あと、お菓子とかお茶とかいらないよ。」

「はいはいわかりましたよ。」

玄関を入っていくと、和室が見えた。廊下もひんやりしてて、これぞ日本家屋ってかんじ。「私の部屋はここ。」

へえ、畳の部屋だ。でも、広さが半端じゃない。多分、私の部屋の二倍はあるなあ・・・。私の部屋が4畳だから、8〜10畳って所かな。奥になんか飾ってあるし。羨ましい。

「ああ、どきどきした。」

「なんで？」

「あそこでちーっすとか言ったら雑刀でやられるからね。」

「こわっ！」

「やっぱり畳は落ち着くなあ〜」
意外に和の物を好むんだ、この人。てつきり家は全部フローリング
かとおもってたんだけどな。
「そうそう。夏休みの宿題やったか？」
「いや〜まだ手も付けてない状態。」
「やばくないか。」
「まあそうなだけどさ〜」

話も中盤に入ってきた頃いきなり結城が

「そういえば、おまえ、仲のいい子達がいるだろ。」
と話を振ってきた。

「いきなりだねー」

「私はそういうグループ的なのには入ってないからわからないんだ。
なんでそんなに一緒にいるのが好きなんだ？一人の方が気楽で楽し
いし、一緒にトイレに行こうなんてめんどくさいだけじゃないのか
？」

「でも、それが友情の証っていうか、一人なんて寂しくて困るよ。」

「そういうものか・・・。」

「結城はもつと友達作った方がいいよ！」

「私は数人の親友だけでいい。他のは知り合いまたは情報収集元。」

「冷めてる〜」

「私は誰にも屈しないからな。」

「そういうもの？」

「ああ。」

それからしばらく喋って、私の用事があるからといって、帰って
きた。

いつまでもこんな生活が続くものだと思っていて疑わなかった。

十三話（後書き）

何この台詞……。くさっ！！どっかに文才とやらは落ちていないか。

一話（前書き）

結城編スタートです

がんばってやる！！

最後にプラグたてたのはいいんだけど、まだどんなことしようかと迷い中です！

（もっと計画性を持てればいいのに）

一話

対向車線から飛び出す車

叫ぶ声

波打つガラス

右側から飛び出してくるボンネット

そして・・・赤い色

それらが断片的に脳裏を駆け巡る。

「うわあああああああ！」

気がつくときそこはいつもの部屋。

「畜生・・・またか。」

たまに見る、あの事故の時の夢だ。

私は後部座席でがっちりシートベルトとベビーチェアに縛られていたから、かすり傷で済んだんだ。

ただとお父さんとお母さんは・・・。

あの後私はおばあちゃんの家に取り返され、小学校を転校し、いじめられ・・・。いい思い出など一つもない。おばあちゃんは厳しくて私はいつも泣いていた。

下手な返答をすると怒られるなら 相手が望み通りの返答をしてやればいい。

所詮人間なんて褒められれば嬉しい、怒られれば泣く。そんなものだ。

会話をすると自分の本性が見抜かれない程度のことしか話さないから自然と口数が少なくなり、一人の時間が増える。その時間を私は読書の時間に当てた。本の虫なのは元からだが、それに拍車がかかった。基本はファンタジーだが、経済書、心理学の本、辞典など、文字ならペットボトルのラベルでも読んだ。

その頃からだったのだろうか、私がただひたすら強さだけを求める

ようになったのは。
隙を見せず、友達を作らず、柔道、空手、合気道、なんでもやった。
強ければいじめられることも、泣くことももうない。
そう信じて。

おばあちゃんは私を私立中学に入学させたいらしい。そう知ったのは6年の夏休みのことだった。
これを知った私はおばあちゃんを失望させないために勉強を始めて
そして受かることができた。
私をいじめていたメンバーの子たちから離れられると知って結構嬉しかった。

一話（後書き）

姉が五月蠅いのでいったんここで切ります。

二話（前書き）

おばあちゃんちで更新します。

さて、今回は何で結城が合唱部に入ったかです！

二話

今日のノルマ@部活を決める

宿題を早めに終わらせる

注！音楽のテストあり

庭の花の手入れ

・・・その他。

やることを書き出して、行動を始める。

これは癖みたいなものだ。

この学校に入って、人間関係は変わったけど、女子の性格はあまり変わらないようだった。

いきなり私の名前は　　だよ！とかいわれてもすぐには覚えられないし、はっきりいって読書の邪魔だった。大体グループが決まって、（わたしはどれにもはいていない）その中の一人が私の目に留まった。木津彩。あいつはどこか曲者のおいがする。狡猾に隠してはいるが、目がなぜか死んでいる気がする。同じ匂いがないこともないが・・・。

さて、宿題はおわったし、後は部活を決めるだけ。

「はあ・・・。」
部活なんて入らなくてもいいと思うんだがおばあちゃんが入れって
いうだろうから、できれば文化部に入ろうと思う。

部活説明会の時に配られたプリントをぱらっとめくる。

私立らしく文化部の数は多い。　吹奏楽部、書道部、イラスト部、
美術部・・・。

そのなかに「合唱部」があった。

「合唱部……。」
そういえば。

「きれい！結城、すごい声がいいよ！どうやったらそんなに綺麗な声が出るの！？私なんて週三で専門の先生にみてもらってるのに！」
「やめる、そんなに綺麗というほどでもないだろうが。」

「いや、すごいよ！」
私の少ない友達ひとりだった子が、べた褒めしてくれたことがあった。その子はすごく歌が綺麗なお嬢さんだった。いつも不機嫌な私をつまい具合に乗せたりとか、あとなぜか悩み事があったら私に相談しに来ていた。その後私は転校したけど、住所を交換して今でも交流は続いている。

「合唱部に入れば、この声に磨きをかけることができるかもしれない……！」
そんなことで私は合唱部に入ることにしたんだ。

練習は結構きついけど、こえは確実に良くなっていると思ったのは、音楽のテストの時だ。

なんか女子はグループ分けがどーたらこーたらでもめていたけど、私は一人で歌った。

音楽室に響き渡る私の声はすごく綺麗だった……と思う。

特に男子が上手いといってくれたのがうれしかった。

女子は上手いと口で言っているもそれはたいていおせじだが、男子は心で思ったことをそのままいってくれるからわかりやすい。

先生も満足してくれたと思う。

これなら、いける。

しかし、女子の、特にあいつの視線が気になった。

二話（後書き）

あいつって・・・。ばねばね。
なんともですな。

三話（前書き）

ストーリーをあんまり考えなくっていいのは楽かもしれない。

三話

さて。

歌うか。

結構先輩たちも優しく、ほんわかした空気の私の入っている合唱部は、とっても和むんだけど、だらだらしすぎるのはよくないと思う。

先生もなかなか来ないし（忙しいらしい）それに加えて運動部が練習してるのが丸見えなところにある音楽室ぶじつだもんで、つついわたしもだらけるんだが。
ちゃんとやるときはやるようにしている。

『私の瞳は蒼い』

ソプラノが歌い出し、メゾが続き、アルトが入る。

ちなみにアルトだ。

入ったときにテストを受けて、高いラの音まで出たんだけど、声質こえしつが低いからってアルトになった。まあ、いいんだけどね。ソプラノもやってみたかった。

唄を歌うと無心になれる。丁度座禅ちやうぜんした時みたいに、頭が真っ白になっ
ていいんだ。

本音はそんなこと考えてるよりも次どこで息を吸うかやどこを強くする、ここは母音をはっきりさせるなどの注意事項でいっぱい、がんばってるんだけど。

「おつかれ〜！」

やっと終わった〜結構長い部活。

みなさん、どうせ文化部でしょって言わないでください！一回体験してみるといいよ、疲れるから。

だって学校の周り走らないといけないし、腹筋背筋運動はかさずやらないといけないし、なにげに辛い……。

「ねえ、結城はこのグループに入るの〜？」

「そっぴや、明日遠足のグループ決めか……。めんどくせ！適当に余った人と一緒になるよ！」

「結城つて冷めてるよね」

「だってめんどくさい。あ、でも、同じクラスに親友がいたら話は別。」

私は友達が少ない。何故か。

答え：激しくえりごのみをするから。

友達なんて親友が2〜3人いればいい。あとのくつついてくるのは友達じゃない、『情報収集源』だ。

合唱部で知り合った親友がいるから。今の状態が一番うれしい。

と、これがわたしの友達に対する見解だ。

友達の友達は友達、なんていう三段論法は私の中では全く存在しない。

まあ、いつか。

三話（後書き）

彩がいろいろ悩んでいるころ、結城ってこんなだったんですね。あ、結城の友達の見解はそのまんま私の信条です。たぶん今親友と心置きなく呼べる存在は5人もいない。

四話（前書き）

長いことほったらかしで誠に申し訳ありませんでした。

四話

今日、班を決めた。

木津彩と一緒にになった。

以上。

私の中ではたかだかそんなことなのに、女子って言うのはどいつもこいつもめんどくさすぎるんだよ！

だいたい何で私が一緒にになりたいと思ってた子とは当然のように引きはがすくせに、自分たちで良いように決めてんだ！高原で一日遊んでくるだけだろ？！余った人でワングループがそんなに嫌か！

という思いを込めて掃除用具入れのロッカーをがんがんに叩いて、蹴って、バキツとかミシツとか言ったけど気にしな〜い。

ああ、確かに私は根暗ねぐらで隅っこで本ばっかよんでるような奇人変人だ！だが、私と一緒にになったぐらいで（ああ、終わった・・・。）って顔をしないでいいと思うよあの木津彩。

やはりバスの座席を班ごとにしなくてよかった。

あいつだってあらかじめ嫌な顔してたし、あのブリツ子学級委員も相当むかついてたところだ。

あんなことも論じられなくてクラス委員だなんておこがましい。

むかついたまま部活へ向かう。

ここの先輩は優しくて、いろいろ話を聞いてくれる。

先輩もよく憂さ晴らしをここで行ってる。

私と話が合う親友もできた。

だから、ぎすぎすした雰囲気のある教室よりも部活の方が私はくつろいでいられる。

「どしたのそんなにいらいらして。」

「聞いてよ今日班決めだったんだけど」

今日もまた歌う。

四話（後書き）

最近スランプっぽいかも・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0832u/>

退屈と、出会った彼女

2011年10月9日09時01分発行